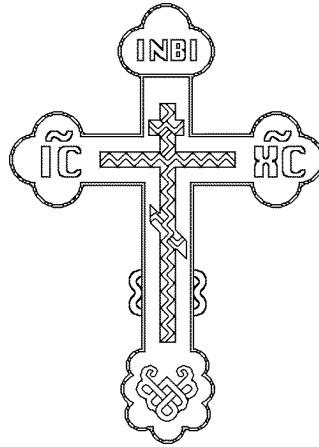




大齋日替わり

第 1 週 金曜日

2016

第 1 週間 金曜日

早 課

カフィズマ 第 13 「カフィズマ」 (90-92、94-95-96、97,98-100 聖詠)

第 91 聖詠<第 90、92 聖詠省略>

しじょうしゃ しゅ さんえい なんじ な うた なんじ あわれみ あさ の なんじ まこと よ の
至上者 よ、主を讃榮し、爾の名に歌ひ、爾の 憐 を朝に宣べ、爾の 眞 を夜に宣べ、
これ の じゅうげん がつき きん もつ うた しつ もつ び かな けだししゅ
之を宣ぶるに 十絃 の樂器と 琴とを以てし、歌と 瑟とを以てするは美なる哉。 蓋 主よ、
なんじ なんじ さくい もつ われ たのし われなんじ て しわざ よろこ たのし しゅ なんじ
爾は 爾の作爲を以て我を 樂 ませたり、我 爾が手の工作を 歡 び 樂 む。主よ、 爾の
しわざ なん おおい なんじ おもい きわ ふか ふち ひと これ し おろか もの これ
工作は何ぞ 大 なる、爾の思念は極めて深し。不知なる人は之を知らず、愚 なる者は之を
さと かくしゃ くさ ごと しょう ふほう おこな もの はな なが ほろ ただなんじしゅ
悟らず。 悪者は草の如く 生 じ、不法を 行 ふ者は花さけども 永く亡ぶ、唯 爾 主よ、
えいえん たか けだしみ しゅ なんじ てき み なんじ てき ほろ およ ふほう おこな もの さん
永遠に高し。 蓋 視よ、主よ、 爾の敵、視よ、 爾の敵は滅び、凡そ不法を 行 ふ者は散
ず、然れども我が角は、 爾之を 兇の角の如くに擧ぐ、我 新なる 膏を傳けられたり、我
め わ てき み わ みみ た われ せ かくしゃ こと き ぎじん しげ しゅろ ごと
が目は我が敵を見、我が耳は起ちて我を攻むる 悪者の事を聞く。義人は繁ること棕櫚の如く、
たか
高くなることリワンの 栢香木の如し。彼等は主の宮に植えられて、我が神の庭に榮ゆ、彼等
お み むす うるおい かつあらた しゅわ かため ぎ そのうち ふぎ あらわ
は老いても實を結び、 潤 あり、且 新にして、主 吾が防固の義にして、其 中に不義なきを 表
すを致す。

光榮は父と子と聖神に歸す。

誦經者の「光榮は」に続いて



今も 何時も 世世に アミン アリルイヤ、アリルイヤ アリルイヤ

3回

神よ光榮は なんじに 歸す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、

誦經者の「今も」に続く

光榮は 父と子と 聖神に歸す

誦經、今も何時も世々に、「アミン」。

第95聖詠 <第94、96聖詠省略>

あらた うた しゅ うた ぜんち しゅ うた しゅ うた そのな あが ほ そのすくい ひび
新なる歌を主に歌へ、全地よ、主に歌え、主に歌ひて其名を崇め讃め、其救を日日に

ふくいん そのこうえい しょみん うち つた そのきせき ばんぞく うち つた けだししゅ おおい
福音せよ、其光榮を諸民の中に傳へ、其奇跡を萬族の中に傳へよ。蓋主は大にし

さんび かれ ことごと かみ おそ けだししょみん ことごと かみ ぐうぞう ただ
て讃美せらるべく、彼は悉くの神より畏るべし。蓋諸民の悉くの神は偶像なり、惟

しゅ しょてん つく こうえい いげん そのかんばせ まえ あ のうりよく びこう そのせいしょ あ
主は諸天を造れり。光榮と威嚴とは其顔の前に在り、能力と美好とは其聖所に在り。

しょみん しょぞく しゅ き こうえい さんき しゅ き そのな こうえい もつ しゅ き
諸民の諸族よ、主に歸せよ、光榮と尊貴とを主に歸せよ、其名の光榮を以て主に歸せよ、

れいもつ たずさ そのいん い うるわ せいしょ おい しゅ おが ぜんち そのかんばせ まえ おの
禮物を攜へて其院に入れ、美しき聖所に於て主を拜め。全地よ、其顔の前に戦

しょみん い しゅ おう ゆえ せかい けんご うご かれ ぎ もつ しょみん
け。諸民に言ふべし、主は王たり、故に世界は堅固にして揺かざらん。彼は義を以て諸民を

しんばん しょてん たのし ち いわ うみ そのうち み もの な た そのうち
審判せん。諸天は樂むべし、地は祝ふべし、海と其中に盈つる者とは鳴るべし、田と其中

あ もの よろこ はやし しょぼく しゅ かんばせ まえ ま けだしきた きた ち
に在る者とは喜ぶべし、林の諸木は主の顔の前に舞ふべし。蓋來り、來りて地を

しんばん かれ ぎ もつ せかい しんばん しんじつ もつ しょみん しんばん
審判せん、彼は義を以て世界を審判し、眞實を以て諸民を審判せん。

誦經者の「光榮は」に続いて



今も何時も世々にアミン アリルイヤ、アリルイヤ アリルイヤ

3回

神よ光榮はなんじに歸す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、

誦經者の「今も」に続く

光榮は父と子と聖神に歸す

誦經 今も何時も世々に、「アミン」。

第98聖詠 <第97、99、100聖詠省略>

しゅ おう しょみんおのの かれ ざ ち ふる しゅ あ おおい
主は王たり、諸民戦くべし、彼はヘルウィムに坐す、地は震ふべし。主はシオンに在りて大

かれ ばんみん うえ たか ねが かれらなんじ おおい おそ な さんえい こ せい
なり、彼は萬民の上に高し。願はくは彼等爾の大にして畏るべき名を讃榮せん、是れ聖

おう のうりよく しんばん この なんじ せいり かた た なんじ うち しんばん
なり。王の能力は審判を好む、爾は正理を堅く立てたり、爾はイアコフの中に審判と

こうぎ おこな しゅわ かみ あが ほ そのあしだい ふ おが こ せい しさい うち
公義とを行へり。主我が神を崇め讃め、其足凳に伏し拜めよ、是れ聖なり。司祭の中に

およ かれ な よ もの うち かれらしゅ よ しゅこれ
モイセイ及びアアロンあり、彼の名を呼ぶ者の中にサムイルあり、彼等主に呼びしに、主之に

き かれ くもばしら うち おい これ い かれら そのいましめ そのこれ たま おきて まも
聴けり。彼は雲柱の中に於て之に謂へり、彼等は其誠と其之に賜ひし律とを守れ

しゅわ かみ なんじかれら き なんじ かれら ため ゆる かみ またそのおこない ばつ かみ
り。主我が神よ、爾彼等に聴けり、爾は彼等の爲に恕す神、又其行を罰する神たり

しゅわ かみ あが ほ そのせいざん おい ふ おが しゅわ かみ せい
き。主我が神を崇め讃め、其聖山に於て伏し拜めよ、主我が神は聖なればなり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

しゅあわれ
主 憐めよ。三次

<続けて誦経>

斎1 セダレン 【坐誦讃詞】 イオシフ師の作。第二の調。

ひと あい しゅ なんじ くるしみ しゅう くるしみ あた もの なんじ しんせい じゅうじか
人を愛する主、爾の苦にて衆に苦なきを與へし者よ、爾の神聖なる十字架を

もつ わ にくたい しょよく ころ われ なんじ せい ふっかつ み た もの な たま
以て我が肉體の諸慾を殺して、我を爾の聖なる復活をも見るに勝ふる者と爲し給へ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

十字架生神女讃詞、

じょさい いさぎよ しょうしんじょ われらなんじ こ とうと じゅうじか まも みなたたか もの およそ
女宰、潔き生神女よ、我等爾の子の尊き十字架に護られて、皆戦ふ者の凡

こうげき たやす か ゆえ よろ かな なんじ かみ はは わ たましい ひとつ たのみ
の攻撃に輒く勝つ。故に宜しきに合ひて爾を神の母、我が靈の一の恃として

つね さんよう
常に讃揚す。

しゅあわれ
嗣ぎて誦す 主 憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

<戻る。枠 P12、 50 聖詠>

斎2 カノン 【三歌經の規程】第二の調

第五歌頌 預言者イサイヤの歌句、イサイヤ二十六章九至十九節

右誦經句 我^{われ}夜中^{やちゆう}我が^わ 靈^{たましい} にて^{なんじ} 爾^{した} を慕^{あした}へり、晨^わ より我が^{ちゆうしん} 中心^{なんじ} にて^{たず} 爾^{たず} を尋ねん。

左誦經句 蓋^{けだし} 爾^{なんじ} の審判^{しんぱん} が地^ち に 行^{おこな} はるる時^{とき}、世^よ に居^おる者^{もの} は義^ぎ を學^{まな}ぶ。

右 句 主^{しゅ}よ、爾^{なんじ} の手^て は高^{たか} く舉^{あが}りたり、然^{しか}れども彼等^{かれら} は之^{これ} を見^みざりき、爾^{なんじ} の民^{たみ} を惡^{にく}む者^{もの} は之^{これ} を
見^みて愧^はぢん、火^ひ は爾^{なんじ} の敵^{てき} を嚙^かまん。

左 句 主^{しゅ}我が^わ 神^{かみ}よ、爾^{なんじ} の外^{ほか} に他^たの主^{しゅ}は曾^{かつ}て我等^{われら} を治^{おさ}めたり、然^{しか}れども唯^{ただ} 爾^{なんじ} に由^よりて我等^{われら} 爾^{なんじ} の
名^なを讃^{さん}えい榮^{えい}す。

右 句 主^{しゅ}よ、爾^{なんじ} 已^{すで}に民^{たみ}を増^まし、已^{すで}に民^{たみ}を増^まして、己^{おのれ} の光榮^{こうえい}を顯^{あらわ}せり。

左讃詞 狡猾^{こうかつ}の者^{もの}は我^{われ}の中に罪^{うち}を見て、務^{つみ}めて罪^みを行^{つと}ふを助^{つみ}け、實^{おこな}に我が滅亡^{たす}の爲^{じつ}に喜^わぶ。惟^{ほろび}
祈^{いの}る、救世主^{きゅうせいしゅ}よ、爾^{なんじ} 我^{われ}に之^{これ}を殺^{ころ}さん爲^{ため}に力^{ちから}を與^{あた}へ給^{たま}へ。

右 句 主^{しゅ}よ、患難^{かんなん}の時^{とき}我等^{われら} 爾^{なんじ} を尋^{たず}ね、爾^{なんじ} の懲罰^{こらし}の我等^{われら} に及^{およ}べる時^{とき} 静^{しずか}に 祷^{いのり}を爲^なせり。

左讃詞 爾^{なんじ} の十字架^{じゅうじか}に於^{おい}て幽暗^{くらやみ}の首領^{しゅりよう}に勝^かちし主^{しゅ}よ、我罪^{われつみ}の深處^{ふかみ}、惡業^{あくぎよう}の坑^{あな}に 陷^{おちい}れども、爾^{なんじ}
の慈憐^{じれん}に因^よりて救^{すく}はれんことを恃^{たの}む者^{もの}を其毒惡^{そのどくあく}より 免^{まぬが}れしめ給^{たま}へ。

右 句 妊^{はら}める 婦^{おんな}の産^{さん}に臨^{のぞ}みて 苦^{くるし}み、其痛^{そのいたみ}に由^よりて號^{さけ}ぶが如^{ごと}く、主^{しゅ}よ、我等^{われら}は 爾^{なんじ} の前^{まえ}に是^かく
の如^{ごと}くなりき。

左讃詞 十字架^{じゅうじか}に釘^{てい}せられて殺^{ころ}されしハリストスよ、罪^{つみ}に殺^{ころ}されたる我が 靈^わを活^{たましい}かし、我^いをし
て熱心^{ねっしん}に 爾^{なんじ} の誠^{いましめ}を行^{おこな}ひて、平安^{へいあん}に 爾^{なんじ} の尊^{とうと}き復活^{ふっかつ}に至^{いた}るに勝^たへしめ給^{たま}へ。

右 句 我等^{われら}妊^{はら}みて劬勞^{くろう}せり、然^{しか}れども産^うむ所^{ところ}は風^{かぜ}に似^にたり、我等^{われら} 救^{すくい}を地^ちに施^{ほどこ}さざりき、世界^{せかい}
の居民^{きよみん}は俯伏^{ふふく}せざりき。

左生神女讃詞 わ にゆうじゃく てらし わ くら たましい すくい いさぎよ しょうじょ われ すく ほろ
我が 柔弱 の光照、我が味まされたる 靈 の救なる 潔 き少女よ、我を救ひ、滅
ぶる者を救ひ、我 甚 しき罪に因りて朽ちたる者に不朽の衣を衣せ給へ。

右 句 なんじ ししや ふつかつ はか あ もの おき ち あ もの たのし
爾の死者は復活し、墓に在る者は起き、地に在る者は 樂 まん。

左讃詞 ひとり ふし しゅ なんじ されこうべ ところ み じゅう てい ひと やから ふし たま
獨 不死なる主よ、爾は 髑髏 の處に身にて自由に釘せられて、人の 族に不死を賜ひ、
其神の像を 改 め給へり。

右 句 けだしなんじ つゆ かれら ため いやし ち その ししや いだ
蓋 爾よりする露は彼等の爲に醫治なり、地は其死者を出さん。

左讃詞 しゅ なんじ くるしみ はなはだ み いっさい ぞうぶつ へん じん おこな せつがい
主よ、爾の 苦 の 甚 しきを見て、一切の造物は變じて、イウデヤ人の 行ひし殺害を
哀哭せり、然れども 爾は 悉 くの者を救はん爲に忍び給へり。

右 句 こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す。

聖三者讃詞、

左 ああ しせい さんしや なんじ われら ほうじ ところ もの なんじ またかくれがおよ けんべい ゆいいち
嗚呼至聖なる三者よ、爾は我等の奉事する所の者、爾は亦避所及び權柄なり、惟一
の性に於て 爾を讃め歌ふ者に罪過の 浄を遣し給へ。

右 句 いま いつ よよ
今も何時も世に、「アミン」。

生神女讃詞、

左 やくひつおよ うつわ しょくあんおよ ひか とうだい ひ も いばらおよ かげ おお
約置及び「マンナ」の器、食案及び光れる燈臺、火の燃ゆる棘及び影に蔭はれたる
神の山たる大名なる童貞・生神女よ、慶べよ。

右 句 われら かみ こうえい なんじ き こうえい なんじ き
我等の神よ、光榮は 爾に歸す、光榮は 爾に歸す。

左讃詞 よ およ よ あ もの よろこ の われら いま とも てい ごと あなどり
世及び世に在る者に 慶べよと陳べて、我等今ハリストスと偕に釘せらるるが如く、侮、
辱、及び其他を忍ばん、彼と偕に 榮を得ん爲なり。

詠) [イルモス]夜過ぎて日近づき、光は世界を照らせり、故に主よ、天軍は爾を歌い、万物は爾を崇め讃む。



【小連祷】

我等復又安和にして主に祷らん。

(詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。(詠) 主爾に司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠)「アミン」



第八歌頌 三少者の歌句、ダニイル三章五十七至八十八節

右誦經句 ^{しゅ}主の ^{ことごと}悉くの造物は主を崇め讃めよ、^{かれ}彼を歌ひて^{よよ}世世に^ほ讃め^あ揚げよ。

左誦經句 ^{しゅ}主の^{しよてんし}諸天使、^{しゅ}主の^{しよてん}諸天は主を崇め讃めよ、^{かれ}彼を歌ひて^{よよ}世世に^ほ讃め^あ揚げよ。

右 句 ^{しよてん}諸天の^{うえ}上に^あ在る^{みず}水、^{しゅ}主の^{ぼんぐん}萬軍は主を崇め讃めよ、^{かれ}彼を歌ひて^{よよ}世世に^ほ讃め^あ揚げよ。

左 句 ^ひ日と^{つき}月と、^{てん}天の^{ほし}星は主を崇め讃めよ、^{かれ}彼を歌ひて^{よよ}世世に^ほ讃め^あ揚げよ。

右 句 ^{てん}天の^{もろもろ}諸の^{とり}鳥、^{やじゅう}野獸と^{いっさい}一切の家畜と主を崇め讃めよ、^{かれ}彼を歌ひて^{よよ}世世に^ほ讃め^あ揚げよ。

左讃詞 ^{ひとり}獨^{じんじ}仁慈なる者よ、^{もの}爾は^{なんじ}己を^{おのれ}卑くし、^{ひく}慈憐に^{じれん}因りて^よ十字架に登りて、^{じゅうじか}昔^{のぼ}木の^{むかし}食^きに^{しよく}因り^よ

^{おちい}て^{もの}陥^{のぼ}りし者を^{たま}登せ給へり。故に我等^{ゆえ}爾^{われら}讃榮せられし者を^{なんじさんえい}世世に^{もの}崇め^よ歌ふ^{あが}。^{うた}

右 句 人の諸子は主を崇め讃めよ、イスラエル民は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

左讃詞 我不注意の坐睡に因りて罪の深き眠に入れり。然れども爾我がハリストス、我の爲に

十字架に眠りし者よ、我陥りし者を起し給へ、死の夜が我を受けざらん爲なり。

右 句 主の司祭等、主の諸僕は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

左讃詞 我逸樂に暫にせられて、味まされたる靈を贖す、狡猾なる敵は我を見て笑ふ。故に

ハリストスよ、我を照して、其毒惡より世々に脱れしめ給へ。

右 句 諸神と諸聖人の靈と、諸義人と心の謙卑なる者と主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

左生神女讃詞 我怠りて生命を費し、罪の眠にて靈を重くして、爾の寝ねざる祈祷に趨り附

く。至淨なる童貞女よ、我に死に眠ることを許す勿れ。

右 句 アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

左讃詞 ハリストスよ、爾は棘を冠り、紫袍を衣て、美麗を以て悉くの人の子より美し

き者と現れ、光榮を以て輝けり。

右 句 主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

左讃詞 ハリストスよ、爾は膽及び醋を飲みて、爾の神聖なる脇より生命と不朽との二の流

を、忠信に爾を歌ひ、萬世に崇め讃むる者の爲に注ぐ。

右 句 我等主なる父と子と聖神とを崇め讃めん。

聖三者讃詞

唯一の神三者、性の分れず、位の分れたる者、亡びざる權柄、父、子、聖神よ、我等爾を萬世

あが うた
に崇め歌ふ。

右 句 今も何時も世に、「アミン」。

生神女讃詞、

きよ かみ はは てん と すくい もん しゅう ばんせい なんじ さんび もの いのり い
清き神の母、天の戸、救の門よ、衆「ハリスティアニン」、萬世に爾を讃美する者の祈を納
たま
れ給へ。

右 句 我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

左讃詞 ハリストスの帝笏、教會の角、諸王の勝利、「ハリスティアニン」等の守護たる十字架

よ、爾は我を照す者、爾は亦萬世に我の誇る者なり。

(詠) 我等主を讃め、崇め、伏し拝みて、世に歌い讃めん。

[イルモス] 昔シナイ山に於て棘の中にモイセイに童貞女の奇跡を預め示しし者を尊み歌い、崇め讃めて、万世に讃め揚げよ。



しょうしんじょひかり はは ほめうた もつ ほ あ
司祭 生神女 光の母を讃歌を以て讃め揚げん。

(詠) [ヘルビムの歌]

我が心は主を崇め、我が靈は神我が救主を悦ぶ。

附唱 ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく榮え、貞操を破らずして神言を生みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。



第2句 その婢の卑しきを顧み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、

→ヘルビムより尊く

第3句 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは
世世 彼を畏るる者に臨まん

→ヘルビムより尊く

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、

→ヘルビムより尊く

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく
帰らせ給へり。

→ヘルビムより尊く

第6句 其の僕、イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世世に
憐れむ事を記憶し給へり、

→ヘルビムより尊く

第九歌頌 聖ザハリヤの歌句、ルカ六十八至七十九節

右誦經句 祝讃 せらるる哉、主イズライリの神、蓋 其民を眷みて、之に 贖を爲し、

左誦經句 我等の爲に 救の角を其僕ダウィドの家に興せり、

右 句 古世より其聖なる預言者の口を以て言ひしが如し、

左 句 即 我等を我が諸敵及び凡そ我等を惡む者の手より救ひ、

右 句 以て矜恤を我が先祖に施し、其聖なる約、即 我が祖アウラアムに矢ひたる 誓を記念
せん、

左讃調 我の爲に恥づべき釘殺を忍びしハリストス・神の言よ、忌はしき思に因りて癩者と

爲りし我が 霊を爾の血の灑ぐを以て浄めて、我を爾の光榮に興る者と爲し給へ。

右 句 謂^いふ、我^{われ}等^らに我^わが諸^{しよ}敵^{てき}の手^てより救^{すく}はれし後^{のち}、懼^{おそれ}なく、彼^{かれ}の前^{まえ}に在^ありて、聖^{せい}を以^{もつ}て義^ぎを以^{もつ}て、生涯^{しょうがい}彼^{かれ}に事^{つか}へしめんと。

左讃詞 ハリス^{われ}トス^{いま}よ、我^{おこ}忌^{ない}はしき行^{おも}の重^{また}量^かにて全^うく屈^{なん}められて、憂^よひて爾^{ひと}に呼^{あい}ぶ、人^あを愛^いする主^{しゅ}よ、爾^{なんじ}の尊^{とう}き血^ちにて我^わが靈^{たましい}の醫^{いや}し難^{がた}き瘡^{きず}を醫^{いや}し給^{たま}へ、我^わが爾^{なんじ}の神^{しん}性^{せい}を歌^{うた}はん爲^{ため}なり。

右 句 子^こよ、爾^{なんじ}も至^{しじょう}上^{しゃ}者の預^{よげん}言^{しゃ}者と稱^{とな}へられん、蓋^{けだし}主^{しゅ}の面^{めん}前^{ぜん}に行^ゆきて、其^{その}道^{みち}を備^{そな}へん。

左讃詞 我^{われ}は惡^{あく}事^じを食^{しょく}と爲^なし、怠^{おこ}惰^{たり}を飲^{のみ}料^{もの}と爲^なして、一^{いっ}切^{さい}改^{あらた}められずして、徒^{いた}に食^{しょく}物^{もつ}を制^{せい}するこ^{よろこ}を喜^{しゅ}ぶ、主^かは此^{ごと}く^{もの}の如^いき齋^{めい}を命^{あら}ぜしに非^{あら}ず。

右 句 彼^{かれ}の民^{たみ}に、其^{その}救^{すくい}は即^{すな}ち諸^{しよ}罪^{ざい}の赦^{ゆるし}にして、我^わが神^{かみ}の矜^{あわれ}恤^みに因^よるこ^しを知^しらしめん。

生神女讃詞、古^{いにしえ}の違^{いはん}反^{しょうめつ}の消^{げん}滅^ぼ、原^{ふっこう}母^{じん}の復^{かみ}興^き、人^{ゆえん}類^{ぞうぶつ}の神^{しゅ}に歸^{わた}する所^{はし}以^{しょうしん}、造^{じやう}物^{ぶつ}主^{しゅ}に度^たる橋^{はし}なる生^{しょう}神^{しん}女^{じよ}よ、我^{われ}等^ら爾^{なんじ}を崇^{あが}め讃^ほむ。

右 句 此^この矜^{あわれ}恤^みに因^よりて、東^{あさひ}旭^うは上^{われ}より我^の等^ぞに臨^{のぞ}めり。

左讃詞 爾^{なんじ}木^きに釘^{てい}せられし時^{とき}造^{ぞう}物^{ぶつ}は戦^{おの}けり、蓋^{けだし}神^{かみ}として、慈^じ憐^{れん}の多^おきに因^よりて、肉^{にく}體^{たい}にて苦^{くる}を受けたり、我^{われ}等^らを救^{すく}はん爲^{ため}なり。

右 句 幽^{くら}暗^{やみ}と死^しの蔭^{かげ}とに坐^ざする者^{もの}を照^てし、我^{われ}等^らの足^{あし}を平^{へい}安^{あん}の道^{みち}に向^{むか}はしめん爲^{ため}なり。

左讃詞 主^{しゅ}よ、爾^{なんじ}が十^{じゅう}字^{じか}架^かの能^{のう}力^{りよく}は大^おなり、蓋^{けだし}我^{われ}等^ら之^{これ}を己^{おの}れに象^{かたど}りて、直^{ただ}に魔^ま鬼^きの力^{ちから}を退^{しりぞ}く。

右 句 光^{こう}榮^{えい}は父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に歸^きす。

聖三者讃詞、

左 三位^{さんい}なる惟^{ゆい}一^{いち}者^{しゃ}、主^{しゅ}宰^{さい}たる惟^{ゆい}一^{いち}の三^{さん}者^{しゃ}、同^{どう}榮^{えい}なる神^{しん}性^{せい}、父^{ちち}、子^こ、及^{およ}び聖^{せい}神^{しん}よ、我^{われ}等^ら衆^{しゅう}人^{じん}を救^{すく}ひ給^{たま}へ。

右 句 今^{いま}も何^{いつ}時^{とき}も世^よに、「アミ

生神女讃詞、

左 生神女、世界の潔浄たる者よ、慶べ、我等罪なる者皆之に趨り附きて、常に神と和睦
するを得るなり。

右 句 我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

左讃詞 主よ、爾の十字架の神妙なる能力を以て我を固めて、齋の無玷なる浄き期を爾に
ささ 獻げしめ給へ。

(詠) [イルモス]我等信者は皆潔浄無玷なる母童貞女を生神女として歌を以て敬虔に崇め讃む。



<戻る。枠の P15「常に福」へ>

斎3

くづけ スティヒラ
【挿句の 讃頌】 第八の調

<繰り返し略、本来は第1のスティヒラを2回>

句) 主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂まん。

爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂ましめ給へ。願はくは爾

の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

われらよろこ ものいみ めい う けだしげんそ これ まも われら いはい
我等 喜 ばしく 齋 の命を受くべし、 蓋 原祖が之を守りしならば、我等エデムの違背に
あずか われ ころ くだもの み うるわ くら よ とうと しょく う
與らざりしならん。我を殺しし 果 は見るに 美し く、 食ふ に善かりき。 貴 き 食、受
けて後に 卑し くなる 者にて我等目を 奪はれ、 喉 を 悦 ばすべからず、不 節制 を避けて、
あ 飽くと共に 慾に服すべからず、自由 じゆう われら ため し ひ もの ち もつ おのれ する
に我等の爲に死に引かれし者の血を以て 己 に 記す べ
し、 然らば 滅 しか ほろぼ ものわれら ふ われら しせい くら わ
す者我等に觸れず、我等はハリストスの至聖なる「パスハ」を 食ひ て、我が
たましい すくい え
靈 の 救 を得ん。

ねが しゅわ かみ めぐみ われら あ ねが わ て わざ われら たす たま
句 願はくは主吾が神の 恵 は我等に在らん、願はくは我が手の工作を我等に 助け 給へ、
わ て わざ たす たま
我が手の工作を 助け 給へ。

致命者讃詞、

せい もの われらなに もつ なんじら な なんじら うえ
聖なる者よ、我等何を以てか 爾等 を名づけん、ヘルウィムとせんか、ハリストス 爾等 の上
いこ けだしなんじら つね かれ さんえい てんしら けだしなんじら
に息へり、セラフィムとせんか、 蓋 爾等 は常に彼を 讃榮 せり、天使等とせんか、 蓋 爾等
にくたい いと のうりよく けだしなんじら きせき おこな なんじら な おお たまもの
は肉體を厭へり、 能力 とせんか、 蓋 爾等 は奇跡を 行ふ 、 爾等 の名は多く、 寶 は
さら おお われら たましい すく いの たま
更に多し。我等の 靈 の 救はれんことを祈り 給へ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と 聖神 に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

十字架生神女讃詞、同調。

きゅうせいしゅ ばんぶつ なんじ されこうべ ところ てい み とくみなへん しの ふる
救世主 よ、萬物は 爾 が 髑髏 の 處 に 釘せらるるを見る時 皆 變じ、忍びずして戦ひ
おのの きよ どうていじょ なんじ はは な なんじ よ ああ わ こ いとあま われ
慄 けり、清き 童貞女 、 爾 の母は泣きて 爾 に呼べり、嗚呼吾が子、至 甘き 我の
きゅうせいしゅ こ あらた こうえい おどろ あらわれ なん
救世主 よ、此の 新 なる、光榮にして 驚 くべき 顯見は何ぞや。

＜→戻る。 **枠** P19「至上者よ」へ＞

六時課

斎4

預言の^{トロパリ}讃詞、第五の調。

しゅ なんじ じれん もつ われら つみおお いのち く ならわし むか たま けだしわれら なんじ
主よ、爾の慈憐を以て我等の罪多き度生と悔いざる習慣とを迎へ給へ、蓋我等は爾

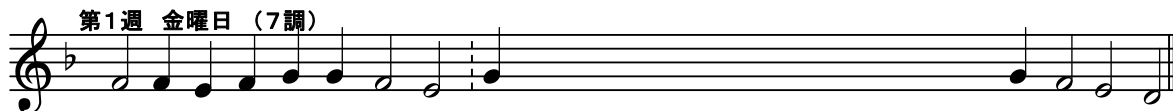
ほか いのち し つかさど た もの し ひと あい しゅ よ すく たま
の外に生と死とを宰る他の者を知らず、人を愛する主なるに因りて救ひ給へ。

司祭 ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし。

^{ポロキメン}
【提綱】

誦經、^{ポロキメン} 提綱、第七の調、第十七聖詠、

しゅわれ ちから われなんじ あい しゅ われ かため
主我の力よ、我爾を愛せん。主は我の防固なり。



主われのちからよ、我爾を愛せん、主は我のかためなり

句) われ かみ われ いわ われかれ たの
我の神、我の磐なり、我彼を恃む。

左列詠隊、同上

誦經、^{しゅわれ ちから われなんじ あい}
主我の力よ、我爾を愛せん。

詠隊、^{しゅ われ かため}
主は我の防固なり。

【預言書の読み】

司祭 ^{えいち}
睿智

誦經 ^{よげんしよ よみ}
イサイヤの預言書の讀。

司祭 ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし。

誦經誦す、

み しゅばんぐん しゅ およ そのよ ところ たの ところ およ そのよ
視よ、主萬軍の主はイエルサリム及びイウダより、其倚る所、頼む所、凡そ其倚る

ところ かと およ そのたの ところ みず ゆうし ぶし しんばんしゃ よげんしゃ ぼくぜいしゃ ちょうろう ごじゅうふ
所の糧、凡そ其頼む所の水、勇士、武士、審判者、預言者、卜筮者、長老、五十夫

ちょう きけん もの ぎかん こうげいしゃ およ ゆうべんしゃ のぞ われどうじ もつ かれら ぼくはく
の長、貴顯の者、議官、工藝者、及び雄辯者を除かん。我童子を以て彼等の牧伯と

な おさなご かれら おさ たみたがい あいしいた ひとのおのそのとなり しいた わか もの
 爲さん、 幼児 は彼等を治めん。 民 互 に相 虐げ、 人 各 其 隣 を 虐げ ん、 少き者
 お もの むか たか いや もの とおと もの むか たか そのときひとちち いえ
 は老いたる者に對ひて高ぶり、 賤しき者は 貴き 者に對ひて高ぶらん。 其時 人 父の家
 おい そのきょうだい すが い なんじ ころも われら つかさ な こ やぶれ なんじ
 に於て、 其 兄弟 に攀りて言はん、 爾 に 衣 あり、 我等の有司と爲れ、 此の敗壞は 爾 の
 て した あ しか かれちか い われいや もの な あた わ いえ かけ
 手の下に在るべしと。 然れども 彼 誓ひて云はん、 我 醫す 者と爲る能はず、 我が家に糧も
 なく、 ころも もなし、 われ た たみ つかさ な なか か やぶ
 なく、 衣 もなし、 我を立てて 民の有司と爲す 母れと。 斯く イエルサリム は敗れ、 イウダは
 たお けだしかれら した かれら おこない しゅ さか そのこうえい め おか かれら おもて
 倒れたり、 蓋 彼等の舌と彼等の 行 とは主に逆ひ、 其 光榮の目を干す。 彼等の 面 の
 あらわれ かれら せ しょう な かつかれら ひとびと ごと あらわ そのつみ い かく
 著現 は彼等を攻むる 證 を作し、 且 彼等はソドムの 人人 の如く、 顯 に其罪を言ひて隠さ
 ず。 彼等の 靈 は 禍 なる哉、 蓋 彼等 自 ら惡の 報 を招く。 義者に謂へ、 彼は 福
 けだしかれ そのおこない み くら ただあくしゃ わざわい かな けだしそのて な ところ ため
 なり、 蓋 彼は其 行 の實を 食はん。 惟 惡者は 禍 なる哉、 蓋 其手の作す 所 の爲
 かれ むくい おさなご わ たみ しいた もの おんな かれ おさ ああわ たみ なんじ
 に彼に 報 あらん。 幼児 は我が民を 虐 ぐる者なり、 婦人は彼を治む。 噫我が民よ、 爾
 みちび もの なんじ まよ なんじ ゆ みち た しゅ しんぱん ため おき た
 を 導く者は 爾 を迷はし、 爾 の往くべき 途を絶てり。 主は 審判の爲に起き、 立ちて
 しょみん しんぱん しゅ そのたみ しょちょうろう しょぼくはく しんぱん
 諸民を 審判 せん。 主は其民の 諸長 老と諸 牧伯 とを 審判 せん。

＜→梓へ戻る P36＞

晩 課

斎 5

「主や爾によぶ」5 調



ま え なんじに呼ぶとき我が祈りの声をいれた ま え

主やわれにききたま え ねがわくは我がいのりは

香炉の香りのごとく汝がかんばせの前にのほり
コウロ カオ

我が手をあぐるは暮れのまつりのごとくいれられん

主やわれにききたま え

誦経 しゅ わ くち まもり おき わ くちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば
主よ、我が口に 衛 を置き、我が 唇 の門を扞ぎ給へ、我が 心 に 邪 なる 言

かたぶ ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか
に 傾 きて、不法を 行 ふ人と共に罪の 推諉 せしむる 母れ。

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい その
我が聲を以て主に籲び、我が聲を以て主に祷り、我が 祷 を其前に注ぎ、我が 憂 を其

まえ あらわ わ たましいわれ うち よわ とき なんじ われ みち し わ ゆ みち おい
前に 顯 せり。我が 靈 我の衷に弱りし時、爾 は我の途を知れり、我が行く路に於て、

かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ
彼等は 竊 に我が爲に網を設けたり。我 右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我

のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんじ よ い なんじ われ
に 遁るる 所 なく、我が 靈 を 顧 る者なし。主よ、我 爾 に呼びて云へり、爾 は我の

かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ
避所 なり、生ける者の地に於て我の分なり。我が籲ぶを聴き給へ、我 甚 弱りたればな

われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ
り、我を 迫害 する者より 救ひ 給へ、彼等は我より強ければなり。

わ たましい ひとや ひ いだ われ なんじ な さんえい たま
我が 霊 を 獄 より引き出して、我に 爾 の名を 讃榮 せしめ 給 へ。＜中略＞

＜続けて＞

【三歌経のスティヒラ】

なんじおん われ たま とき ぎじん われ めぐ
句 爾 恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

しんじゃ きた ひかり うち かみ わざ な ひる あ ごと おこない うるわ およ となり
信者よ、來りて 光 の中に神の事を爲し、晝に在るが如く 行 を美しくし、凡そ 隣

たい ふぎ かきつけ おのれ とお かれ つまづきあるい さまたげ お にくたい いづらく
に對する不義の 書券 を 己 より遠ざけて、彼に 蹟 或 は 礙 を置かず、肉體 の 逸樂

す たましい たまもの ぞうか もと もの かて あた つうかい ころ いだ
を棄て、 霊 の 賜 を増加し、求むる者に糧を與へ、痛悔 の 心 を抱きてハリストスに

つ よ わ かみ われら あわれ たま
就きて呼ばん、我が神よ、我等を 憐 み 給 へ。

致命者讃詞、 第一の調

しゅ われふか ところ なんじ よ しゅ わ こえ き たま
句 主よ、我 深き 處 より 爾 に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き 給 へ。

ちめいしゃ あい もの みなきた しん もつ たの けいが けだしこんにちちめいしゃ
致命者を愛する者よ、皆來りて、神を以て 樂 しみて慶賀せん、 蓋 今日 致命者フェオド

ひみつ えん すす こ われらけいが もの たのし かれ よ か じゅなんしゃ
ルは秘密の筵を進む、是れ我等慶賀する者を 樂 ませて、彼に呼ばしむ、勝たれぬ 受難者、

ちじょう はくがいしゃ おどし むな もの よろこ かみ ため なんじ やぶ からだ
地上の 迫害者の恐嚇を空しくせし者よ、慶 べ、ハリストス神の爲に 爾 の壊るべき 體

くるしみ あた もの よろこ もろもろ かんなん おい てん ぐん じゅくれん ぐんし あらわ
を 苦 に與へし者よ、慶 べ、 諸 の 艱難に於て天の軍の 熟練 なる軍士と 現れし

もの よろこ ゆえ われらもと しょちめいしゃ かざり われら たましい ため いの たま
者よ、慶 べ、故に我等求む、諸 致命者の 飾 よ、我等の 霊 の爲に祈り 給 へ。

ねが なんじ みみ わ いのり こえ き い
句 願はくは 爾 の耳は我が 祷 の聲を聴き納れん。

ちめいしゃ なんじ かみ たま なんじ きせき おんちょう およ しん もつ なんじ
致命者フェオドルよ、爾 は神より賜はりたる 爾 の奇跡の 恩寵 を凡そ 信を以て 爾 に

はし つ もの ひろ ゆえ われらなんじ ほ あ い なんじ とりこ はな びょうしゃ いや
趨り附く者に弘む、故に我等 爾 を讃め揚げて言ふ、 爾 は俘囚を釋ち、 病者 を 醫し、

まず もの と こうかい もの すく しょぼく いたづら に とど とうなん あ もの
貧しき者を富ませ、航海する者を救ひ、諸僕の 徒 に逃ぐるを止め、盜難に遇ひし者

たす ぐんし かす おし じあい もつ しょうしゃ もと ところ あた なんじ せい
を助け、軍士に掠めざることを教へ、慈愛を以て 少者 の求むる 所 を與へ、 爾 の聖な

きおく な もの ため ねっしん てんたつしゃ あらわ しせい ちめいしゃ かれら とも われらなんじ
る記憶を爲す者の爲に 熱心 なる 轉達者 と 顯 る。至聖なる致命者よ、彼等と偕に我等 爾

ちめい ほ うた もの ため の致命を讃め歌ふ者の爲にも、ハリストスに 大 なる 憐を 求め給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す、 第六の調、

てき はいきようしゃ きんちくしゃ りよう はなはだ はかりごと もつ ものいみ きよ
敵は 背教者 たる 窘逐者 を利用して、 甚 しき 謀 を以て、 齋 にて浄めらるる

けいけん ひとびと いま まつり ち けが しよく もつ けが こころ しか
敬虔の 人人を忌はしき 祭の血に汚されたる 食を以て汚さんと 試みたり、然れども

ちめいしゃ なんじ さら ち はかりごと もつ そのあくけい やぶ なんじゆめ とうじ
致命者フェオドルよ、 爾は更に智なる 謀を以て其 悪計を破れり。 爾夢に當時の

しさいしゅ まえ た ちえ ふかみ ひら みだり くわだて あらわ ゆえ われらなんじ かんしゃ
司祭首の前に立ち、智慧の深處を啓きて、 妄なる 計畫を 露せり、故に我等 爾に感謝

たてまつ すく もの な おこな きせき としごと きおく こ のち かみ お
を 奉りて救ふ者と名づけ、 行はれし奇跡を 年毎に記憶し、是の後にも神に於ける

なんじ きとう よ きょうあくしゃ はかりごと がい すく もと
爾の祈禱に因りて、 兇惡者の 謀に害せられずして救はれんことを求む。

今も何時も世世に、「アミン」。

別冊2

その週の調の生神女讃詞を歌ふ **八調経** ¹

<→戻る 「聖にして福たる」 P60>

¹ 大斎第1週奉事式ではすべて1調で代用している。本来はその週、その曜日の生神女讃詞。または月課経のその日の生神女讃詞。

齋 6 【ポロキメン】

輔祭 謹みて聴くべし

司祭 衆人に平安

輔祭 睿智、謹みて聴くべし

誦經 ポロキメン、主は憂^{しゅ}の^{うれ}日に^ひ於て^{おい} 爾^{なんじ}に^き聴かん



(句) イアコフの神^{かみ}の名^なは 爾^{なんじ}を^{ふせ}扨^{まも}ぎ衛らん。

左列 ^{しゅ}主は^{うれ}憂^ひの^{おい}日に^{なんじ}於て^き 爾^きに^き聴かん。

誦經 ^{しゅ}主は^{うれ}憂^ひの^{おい}日に^{おい}於て

(句) ^{なんじ}爾^きに^き聴かん

司祭、^{えいち}睿智。

誦經、^{そうせい}創世記^{よみ}の^{よみ}讀。 (2章20節-3章20節)

司祭、^{つつし}謹^きみて^き聴くべし。

誦經 アダムは^{すべ}凡て^{かちく}の家畜と、^{そら}天空の^{すべ}凡て^{とり}の鳥と、^の野の^{すべ}凡て^{けもの}の獸とに^な名を^{あた}與へたり、^{しか}然

れどもアダムには^{これ}之に^{かな}適^{たすけ}ふ助者見えざりき。^{しゅかみ}主神は^{ふか}アダムを^{ねむ}熟く^{ねむ}睡らしめ、^{とき}睡りし時^{その}其

^{あばら}肋骨^ねの^{ひとつ}一^とを取り、^{にく}肉を^{もつ}以て^{その}其^{ところ}處^みに^{しゅかみ}寢たせり。^と主神は^{あばら}アダムより^{もつ}取りたる^{もつ}肋骨^{もつ}を^{もつ}以

て^{おんな}女^{つく}を^{これ}造り、^{たづ}之を^きアダムに^{たづ}攜へ^{きた}來れり。^いアダム曰^こへり。^{すなわ}是れ^わ乃^{ほね}我が^{ほね}骨^わの^{にく}骨、我が^{にく}肉の^{にく}肉

なり、^こ此れは^{おんな}女^なと^{おとこ}名づけられん、^と男より^{もつ}取られしを^こ以てなり。^{ゆえ}是の^{ひと}故に^{その}人は^{ふぼ}其父母を

^{はな}離れ、^{その}其妻^{つま}に着きて、^{ふたつ}二の^な者一體と^{その}爲らん。^{ふたり}アダムと^{はだか}其妻とは^{はだか}二人共に^は裸にして、^は愧

ぢざりき。主^{しゅかみ}神^{つく}の造^のりたる野^{いきもの}の生物^{うち}の中に蛇^{へび}最^も猾^{とも}かりき。蛇^{へび}婦^{おんな}に謂^いへり、神^{かみ}は眞^{まこと}
 に爾^{なんじ}等^{その}園^{すべ}の凡^きての樹^みの果^{くら}を食^{なか}ふ母^いれと言^{おんな}ひしか。婦^い蛇^{へび}に謂^いへり、我^{われ}等^{その}園^{すべ}の凡^きての樹^の
 果^みを食^{くら}ふを得^う、唯^{ただ}園^{その}の中^{なか}に在^ある樹^きの果^みは、神^{かみ}、爾^{なんじ}等^{これ}之^{くら}を食^{なか}ふ母^{また}れ、亦^{また}之^{これ}に捫^{さわ}る母^{なか}れ、
 死^しなざらん爲^{ため}なりと言^いへり。蛇^{へび}婦^{おんな}に謂^いへり、爾^{なんじ}等^{かならず}必^し死^{かみ}なざらん、神^{なんじ}、爾^{これ}等^{くら}が之^をを食^ふ
 日^ひには、爾^{なんじ}等^めの目^{ひら}開^{なんじ}け爾^{かみ}等^{ごと}神^{ぜん}の如^{あく}くなりて、善^し惡^しを識^{おんな}らんことを知^きりたればなり。婦^{おんな}樹^き
 を視^みて、食^{くら}ふに善^よく、目^めに美^{うる}しく、智^ち慧^えを與^{あた}ふるに因^よりて慕^{した}ふべしと爲^なし、遂^{つい}に果^みを取^とり
 て食^{くら}ひ、亦^{また}之^{これ}を己^{おのれ}と偕^{とも}にする夫^{おと}に與^{あた}へたれば、彼^{かれ}も食^{くら}へり。二^{ふた}人^りの目^め開^{ひら}けて、彼^{かれ}等^ら
 そのほだか其^し裸^{すなわ}なるを知^ちり、乃^は無^{つづ}花果^{おのれ}樹^{ため}の葉^もを綴^{つく}りて、己^ひの爲^{かた}に裳^ぶを作^{とき}れり。日^ひの戻^{かた}ける時^{とき}、
 園^{その}の中^{うち}に遊^{あそ}べる主^{しゅかみ}神^{こえ}の聲^きを聞^ききたれば、アダム及^{およ}び其^{その}妻^{つま}は主^{しゅかみ}神^{かん}の顔^{ばせ}を避^さけて、園^{その}の
 樹^きの間^{あいだ}に匿^{かく}れたり。主^{しゅかみ}神^よはアダムを呼^よびて彼^{かれ}に謂^いへり、アダムよ、爾^{なんじ}何^{なんじ}處^いに在^あるか。彼^{かれ}
 曰^いへり、我^{われ}園^{その}の中^{うち}に遊^{あそ}べる爾^{なんじ}の聲^{こえ}を聞^きき、裸^{はだか}なるに因^よりて、懼^{おそ}れて匿^{かく}れたり。神^{かみ}彼^{かれ}に
 謂^いへり、誰^{たれ}か爾^{なんじ}に裸^{はだか}なることを告^つげたる、我^わが爾^{なんじ}に、此^これのみは食^{くら}ふ母^{なか}れと禁^{いまし}めし
 樹^きの果^みを、爾^{なんじ}食^{なんじ}ひしに非^{あら}ずや。アダム曰^いへり、爾^{なんじ}が我^{われ}に與^{あた}へし婦^{おんな}、彼^{かれ}樹^きの果^みを我^{われ}に
 與^{あた}へたれば、我^{われ}食^{くら}へり。主^{しゅかみ}神^{おんな}は婦^いに謂^いへり、爾^{なんじ}何^{なんじ}ぞ之^{これ}を爲^なしたる。婦^{おんな}曰^いへり、蛇^{へび}我^{われ}
 を惑^{まど}はして、我^{われ}食^{くら}へり。主^{しゅかみ}神^{へび}蛇^いに謂^いへり、爾^{なんじ}此^{これ}を爲^なししに因^よりて、凡^{すべ}ての家^{かち}畜^{くお}及^よび
 凡^{すべ}ての野^のの獸^{けもの}の中^{うち}に詛^{のろ}はれたり、爾^{なんじ}は腹^{はら}行^{ばい}して、一^{いつ}生^{しょう}の間^{あいだ}塵^{ちり}を食^{くら}はん、又^{また}我^{われ}、
 爾^{なんじ}と婦^{おんな}との間^{あいだ}、及^{およ}び爾^{なんじ}の苗^{すえ}裔^{おんな}と婦^{すえ}の苗^{あいだ}裔^{あだ}との間^おに仇^{かれ}を置^{なんじ}かん、彼^{かしら}は爾^のの首^をを
 碎^{くだ}き、爾^{なんじ}は彼^{かれ}の踵^{くび}す^さを刺^{おんな}さん。婦^いに謂^いへり、我^{われ}大^{おおい}に爾^{なんじ}の悲^{かな}哀^{しみ}と爾^{なんじ}の歎^{なげ}息^きとを増^まさ
 ん、爾^{なんじ}苦^{くる}しみて子^こを産^{さん}まん、又^{また}爾^{なんじ}は夫^{おと}を戀^{した}ひ、彼^{かれ}は爾^{なんじ}を治^{おさ}めん。アダムに謂^いへり、
 爾^{なんじ}其^{その}妻^{つま}の言^{こと}を聴^ききて、我^わが爾^{なんじ}に禁^{いまし}めて、此^{これ}のみは食^{くら}ふ母^{なか}れと言^いひし樹^のの果^きを食^みひ

しに^よ因りて、土は^{つち}爾^{なんじ}の爲^{ため}に^{のろ}詛はる、爾^{なんじ}は一生^{いつしやう}の間^{あいだ}苦^くしみて之^{これ}より食^{しょく}を得^えん、土^{つち}
 は荊^{いばら}と薊^{あざみ}とを爾^{なんじ}の爲^{ため}に生^{しょう}ぜん、又^{また}爾^{なんじ}は野^のの草^{くさ}蔬^{くら}を食^くはん、爾^{なんじ}は面^{おもて}に汗^{あせ}して
 爾^{なんじ}の食^{しょく}を食^くひ、爾^{なんじ}が取^とられし所^{ところ}の土^{つち}に歸^{かえ}るに迫^{およ}ばん、蓋^{けだし}爾^{なんじ}は塵^{ちり}にして塵^{ちり}に歸^{かえ}
 らん。アダム其^{その}妻^{つま}の名^なを生命^エと名^ワづけたり、彼^{かれ}は悉^{ことごと}く^いの生^{もの}ける者^はの母^はなればなり。

輔祭 ^{つつし}謹^きみて聴くべし。

誦經 ^{ボロキメン}提綱、第六の調。 第二十聖詠

主^{しゅ}よ、爾^{なんじ}の力^{ちから}を以^{もつ}て自^{みづか}ら舉^{あが}れ、我等^{われら}は爾^{なんじ}の權能^{けんのう}を歌頌^{かしょう}讃^{さん}榮^{えい}せん。



誦經(句) ^{しゅ}主よ、^{おう}王は^{なんじ}爾^{ちから}の力^{たの}を樂しまん。

(詠) 繰り返す

誦經 ^{しゅ}主よ、^{なんじ}爾^{ちから}の力^{もつ}を以^{みづか}て自^{あが}ら舉^あれ、

(詠) ^{われら}我等^{なんじ}は^{けんのう}爾^{かしょうさんえい}の權能^{えい}を歌頌^{さん}讃^{えい}榮^{せん}せん。

輔祭 ^{めい}命ぜよ。

兩手に香炉と火つけた燭台を取り、宝座の前に立ち、東に向かって十字を描いて、
 司祭 ^{えいち}睿智、^{つつし}肅^たみて立て。

それから西に向き直って、会衆に向かって
 司祭 ^{ひかり}ハリストスの光^{しゅうじん}は衆人^{てら}を照す。

このとき会衆は伏拝する。²

² エルサレムの聖墳墓教会の受難週に灯りを取る儀式から始まったと言われる。

司祭、^{えいち}睿智。

誦經 ^{しんげん よみ}箴言の讀。

輔祭 謹みて聴くべし

^{しゅ ちえ もつ ち さだ めいてつ もつ てん た}主は智慧を以て地を奠め、^{そのちしき よ ふち ひら くも}明哲を以て天を建てたり、其知識に因りて淵は啓かれ、雲は

^{つゆ したた わ こ これら なんじ め はな なか さとり つつしみ まも しか これ}露を滴らす。我が子よ、此等を爾の目より離す勿れ、^{さとり つつしみ まも しか これ}聰明と謹慎とを守れ、然らば此

^{なんじ たましい いのち な なんじ くび かざり な か なんじやす なんじ みち}は爾の靈の生命と爲り、爾の項の飾と爲らん。斯くして爾安らかに爾の途を

^{ゆ なんじ あし つまづ なんじふ ときおそ ところ ねむ ときなんじ ねむり うま}行き、爾の足は蹶かざらん。爾臥す時懼るる所あらず、眠る時爾の寢は酣か

^{なんじにわか おそれ おそ あくにん ほろび きた とき これ おそ けだししゅ なんじ}らん。爾猝然なる懼を畏れず、惡人の滅亡の來る時も之を恐れざらん、蓋主は爾

^{たのみ な なんじ た まも とらわ まぬが も なんじ てたす え}の倚頼者と爲りて、爾の足を守りて累るるを免れしめん。若し爾の手助くることを得

^{もと もの ぜん な じ なか も なんじ ゆう ところ なんじ とも さ}ば、需むる者に善を爲すを辭する母れ。若し爾に有する所あれば、爾の友に、去り

^{またきた われみようにちなんじ あた い なか けだしらいじつ なに う なんじし}て復來れ、我明日爾に予へんと謂ふ母れ、蓋來日は何を生むを爾知らざるなり。

^{なんじ ともやす なんじ かたわら お とき かれ むか あく はか なか ひとなんじ あく}爾の友安らかに爾の傍に居る時は、彼に向ひて惡を謀る母れ。人爾に惡を

^{な とき ゆえ かれ あらそ なか きょうぼう ひと うらや なか そのみち ひとつ えら}爲さざる時は、故なく彼と争ふ母れ。強暴の人を羨む勿れ、其途の一をも擇ぶ

^{なか けだしよこしま もの しゅ にく ところ ぎしや そのした もの しゅ のろい あくにん}勿れ、蓋邪曲なる者は主の惡む所にして、義者は其親しき者なり。主の詛は惡人

^{いえ あ ぎじん すまい しゆくふく しゅ ほこ もの てき へりくだ もの おんちよう たま}の家に在り、義人の住居は祝福せらる。主は誇る者に敵し、謙る者に恩寵を賜ふ。

＜→柀へ戻る P61＞